

*A História e as Perspectivas  
do Intercâmbio Bilateral*

## 交流の歴史と展望

日本人ブラジル移住百周年を記念する  
「日本ブラジル交流年二〇〇八」に合わせ、  
ブラジルと日本の交流の  
歴史をたどり今後を展望します。  
ごく最近まで移民の送り出し国であった  
日本をふり返るとともに、  
移民の受け入れ国に変わった現在、  
日本がめざすべき多文化社会について考えます。

国立民族学博物館公開講演会  
日伯交流年事業

# ブラジルと日本



**2008年10月17日[金] 18:00-20:10 [開場 17:00]**

**会場：日経ホール（日本経済新聞社ホール）**

東京都千代田区大手町1-9-5 日本経済新聞社ビル内

**定員：600名 参加費：無料**

写真提供：株式会社商船三井、JICA横浜 海外移住資料館、庄司博史

プ  
ロ  
グ  
ラ  
ム

- 17:00~18:00 受付
- 18:00~18:05 開会  
川合 英雄 (日本経済新聞社大阪本社 編集局長)
- 18:05~18:10 挨拶  
松園 万亀雄 (国立民族学博物館長)
- 18:10~18:45 講演①  
「われら日本人、新世界に参加す」  
中牧 弘允 (国立民族学博物館 民族文化研究部 教授)
- 18:45~19:20 講演②  
「われらブラジル人、日本社会に参加す」  
アンジェロ・イシ (武蔵大学 社会学部 准教授)
- 19:20~19:35 休憩
- 19:35~20:10 パネル・ディスカッション  
中牧 弘允/アンジェロ・イシ  
司会 庄司 博史 (国立民族学博物館 民族社会研究部 教授)
- 総合司会 南 真木人 (国立民族学博物館 研究戦略センター 准教授)

目  
次

松園 万亀雄 「ごあいさつ—開館30周年記念事業を終えて—」 .....	1
庄司 博史/南 真木人 「講演会テーマ『ブラジルと日本—交流の歴史と展望』について」 .....	2
中牧 弘允 「われら日本人、新世界に参加す」 .....	3
アンジェロ・イシ 「われらブラジル人、日本社会に参加す」 .....	7
みんなくウィークエンドサロン 研究者と話そう .....	11
JICA横浜 海外移住資料館 .....	12

## ごあいさつ —開館30周年記念事業を終えて—

国立民族学博物館長 松園 万亀雄

### ◆はじめに

国立民族学博物館（以下、「みんぱく」と略称）は、毎年、東京と大阪で公開講演会を開催しています。東京の公開講演会では、2000年から日本経済新聞社にご協力をいただいております。

東京での公開講演会は、「みんぱく」の研究者の研究成果の一端をご紹介すると同時に、関西に立地する「みんぱく」の存在を関東のみなさまにも広く知っていただき、さらに、文化人類学は面白い学問だということを知っていただくために開催しております。

### ◆国立民族学博物館

#### 開館30周年記念事業を終えて

「みんぱく」は、文化人類学・民族学に関する調査・研究をおこなうとともに、その成果にもとづいて、民族資料の収集・公開などの活動をおこなう研究所です。大阪万博の跡地内に、1974年に創設され、その3年後の1977年11月に常設展示場が開館しました。

昨年、開館30周年をむかえました。それを記念して、記念式典、講演会、シンポジウム、特別展示、企画展示、それに来館者と「みんぱく」教員とのふれあいの場であるウィークエンド・サロンなど、形式も内容も多岐にわたる事業をおこないました。「みんぱく」の歴史を振り返り、現在の研究動向を紹介する記事や映像が、

さまざまなメディアをとおして報道されました。

「みんぱく」が研究所として掲げる目的は、開館30年後のいまも変わりません。しかし「みんぱく」をとりまく環境は、近年激変しました。そのため、「みんぱく」の研究者たちは、研究の課題や研究手法を見直し、新しい研究の可能性を追究しています。博物館展示も、世界の変化に対応すべく、新たな展示に切り替える作業に、今年から着手しております。

「みんぱく」は研究者だけでなく広く市民に公開されている研究所です。「みんぱく」にある膨大な資料を、市民のみなさまにも大いに活用していただきたいと思っています。



記念式典で式辞をのべる松園万亀雄館長



## 講演会テーマ

# 「ブラジルと日本—交流の歴史と展望」について

民族社会研究部 教授 庄司 博史

研究戦略センター 准教授 南 真木人

### ◆今なぜブラジルか？

今回の講演会では、今年が日本人ブラジル移住100周年を記念する「日本ブラジル交流年2008」であることに合わせ、ブラジルと日本の交流の歴史をたどり今後を展望します。

1908年、第1回の日本人移民781人を乗せた「笠戸丸」は、神戸を出港し、ブラジルのサントス港に到着しました。これが日本とブラジルの人的交流のはじまりです。南米への移民は、1885年より続いたハワイやアメリカ西海岸への移民受け入れが、日本人移民排斥によって閉ざされたため、新天地を求めてはじまったものです。それ以降、ブラジルへの日本人の大量移民は、最後の移民船「にっぽん丸」(1973年)をもって終了するまで続きました。今日、ブラジルにおける日系人の数は約150万人に達し、ブラジル国民として、移住当初に従事した農業のみならず各界で活躍しています。

他方で1980年代後半からは、日本経済の好景気に伴って、日系ブラジル人の来日と就労が見られるようになりました。とくに、1990年に「出入国管理及び難民認定法」(入管法)が改正され、日系人3世までの入国・就労が認められるようになると、その数は急増しました。現在は、約30万人の日系ブラジル人が日本で暮らしていますが、家族での移住も増え、滞在が長期化するに従い、不安定な雇用、

社会保険への未加入、子どもの不就学、そして日本語習得や母語教育にかかわる問題など、彼／彼女らを主流社会に統合していく制度の不備が深刻化しています。

### ◆移民の受け入れ国として

現在、日本は少子・高齢化社会を迎え、労働者不足を補うため多くの外国人を受け入れています。さらに、IT産業や看護・介護労働の場においても、外国人にその門戸を開こうとしています。しかし今後は、労働者を含めたさまざまな移民の受け入れ国として、どのような理念のもとに、どのような社会を築くべきかを考えなければなりません。それには、日本がごく最近まで移民の送り出し国であった事実や、在日コリアン、中国人など戦前戦中から定住する外国人の来日の経緯や処遇などを踏まえずには前進できません。同様に、日系ブラジル人の移住と来日、定住は、日本が今日めざそうとする多文化社会を構想するうえで、重要な論点を私たちに問いかけています。

国立民族学博物館では、2004年に特別展「多みんぞくニホン—在日外国人のくらし」(庄司博史 実行委員長)を開催するなど、国内の外国人移民の生活を紹介し、求められる共生社会の見取り図を議論してきました。今回はその成果を踏まえ、歴史的な深度をもって移民現象を考えてみます。



# われら日本人、新世界に参加す

民族文化研究部 教授 中牧 弘允

## 1.はじめに

演題は、1978年のブラジル移住70周年の折、国立民族学博物館長だった梅棹忠夫氏がサンパウロで講演したときの標語です。新世界への移住は新文明への参加であり、日本人もその文化的特質をたずさえて国家形成に寄与したというテーゼです。それから30年、国策移住はなくなりましたが、現地社会への参加の度合いはすすんでいます。この機会に、あらためて日本人の海外移住の文明史的意義を問いたいとおもいます。とくに本講演では博物館展示に焦点を合わせることにいたします。

## 2.サンパウロのブラジル日本移民史料館 (Museu da Imigração Japonesa no Brasil)

サンパウロのブラジル日本移民史料館は梅棹氏の助言のもとづき、「われら日本人、新世界に参加す」を基本テーマとし、1978年に開館しました。入口ちかくに笠戸丸の模型をおき、奥には入植初期の開拓小屋を復元し、日本人が新世界に移住しあたらしい生活をひらいたことを印象づけています。また、農業分野を中心に産業開発への参加と貢献を強調する展示となっています。のちに、戦後の生活文化の展示空間が増設されました。



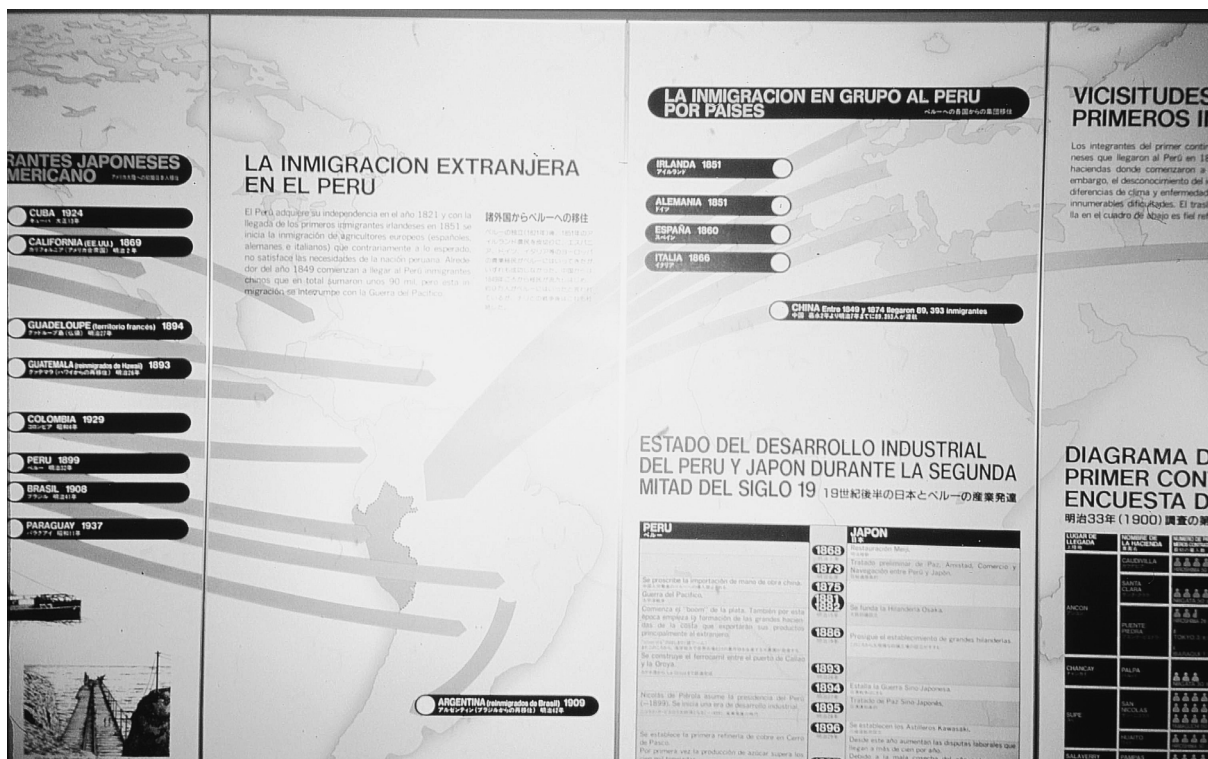
移民小屋の展示 (ブラジル日本移民史料館)

### 3. リマのペルー日本人移住史料館 (Museo Conmemorativo de la Inmigración Japonesa en el Perú)

移住80周年（1979年）を記念して設立されたペルー日本人移住史料館の展示では、移民のペルー到着に先立つ歴史を展示しています。日本人とペルーの先住民はモンゴロイドとして共通のとおい先祖をもち、日本とペルーはそれぞれの文明のながれに身をゆだねましたが、ふたたび移民をとおして再会したという物語です。この展示にはラテンアメリカのエスノヒストリー（民族史学）を専門とする増田義郎氏（東京大学名誉教授）が関与しました。

### 4. ロサンゼルス全米日系人博物館 (Japanese American National Museum)

全米日系人博物館ではハートマウンテン収容所にのこされたバラックの一部を移築し、展示の中核としています。戦時中の強制収容については1988年に補償問題の解決をみていますが、全米日系人博物館はその悲惨な体験を、アメリカ市民をはじめとする来館者と共有することを主目的として1999年に新パビリオンが開館しました。したがって、展示では人種差別にもとづく強制収容というようなことが二度とおきないようにとのメッセージが強く込められています。



ペルーへの移住者の流れ（ペルー日本人移住史料館）



5.ホノルルの日本文化センター歴史ギャラリー  
(Historical Gallery, Japanese Cultural Center of Hawaii)

1994年にオープンしたギャラリーの全体テーマは「おかげさまで—ハワイの日本人物語」です。入口には10本の石柱がならんでいます。そこには日本語の文字が刻まれ、壁面のパネルにはアルファベットでその読み方と英訳が記されています。その文字とは「義理」「名誉」「恥、誇り」「責任」「忠義」「感謝」「仕方がない」「頑張り」「我慢」そして「恩」です。これは一世からまなんだ価値観をあらわし、石柱は「価値マーカー (value markers)」とよばれています。官約移民の時代 (1885-1894年) から日本人がハワイに持ち込んだところの価値観がストレートに表現されています。



ホノルルの日本文化センター歴史ギャラリー  
(同館リーフレットより)



ハートマウンテン収容所のバラック (全米日系人博物館)



## 6. JICA 横浜の海外移住資料館

(Japanese Overseas Migration Museum)

「われら新世界に参加す」を基本テーマに2002年に開館しました。

歴史展示は「はじまり」を目安として5期に分けられています。第Ⅰ期は「海外渡航のはじまり 1853-1884年」、第Ⅱ期は「海外出稼ぎのはじまり 1885-1907年」、第Ⅲ期は「定住移民(移殖民)のはじまり 1908-1944年」、第Ⅳ期は「移住の中断 1941-1945年」、そして第Ⅴ期「戦後移住のはじまり 1945年-」です。

参加の実態を示す展示は「移住の背景-なぜ海外へ行ったのか」「移住の道り-どうやって行ったのか」「移住先の風景-どんなところへ行ったのか」「移住者のなりわい-どんな仕事についたの

か」「移住者の家庭-どんな暮らしをしたのか」「移住者のきずな-どのようなコミュニティをつくったのか」「ニッケイ・ライフ・ヒストリー」「日本の中のニッケイ・世界の中のニッケイ」の各コーナーで構成されています。

## 7. 日本各地の移民ミュージアム

国内には横浜の海外移住資料館のほかにも山口県大島町の日本ハワイ移民資料館をはじめ和歌山県御坊市、沖縄県南風原町、沖縄県立博物館などで移民の展示がなされています。また来年5月末には旧神戸移住センターにおいて「希望と未知の船出」をテーマに新しい展示が予定されています。



1920年のローズ・フェスティバルの野菜山車 (JICA 横浜海外移住資料館)

# われらブラジル人、日本社会に参加す

武蔵大学 社会学部 准教授 アンジェロ・イシ

## 1. 「在日ブラジル人」という視点

この講演では、日本に住む32万人以上のブラジル国籍者が秘める様々な可能性について注目を促したい。

1990年の出入国管理法の改正を機に、ブラジルから日本へのいわゆるデカセギ移民がブーム化した。今では、日本に住む外国籍住民の中で、ブラジル国籍者は中国籍と韓国・朝鮮籍に次いで3番目に多い。日本ではこれらの移民は「日系ブ

ラジル人」や「日系人労働者」というふう呼ばれて来たが、私は「在日ブラジル人」という呼称にこだわっている。その理由の一つは、かれらの日本での滞在している。日系ブラジル人の二世や三世は、今や「在日ブラジル人一世」に変身したといえる。



静岡県浜松市で行なわれた移民百周年記念のイベントは「ありがとう！日本」という、日本社会へのラブコールだった。

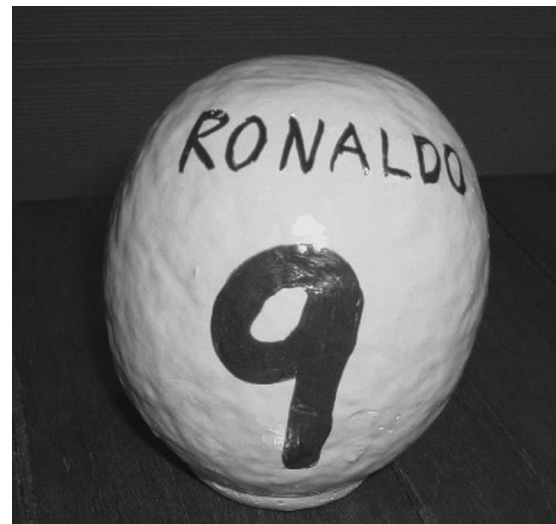
## 2. 知られざる貢献

これら在日ブラジル人は、様々な形で日本社会のために貢献している。まず、労働者として、日本の製造業を支えている。これは、最も知られている彼らの顔である。しかし、他にもあまり知られていない数多くの貢献がある。例えば、ブラジル人の集住地域においては、納税者・消費者として、各地域において多大な経済効果をもたらしている。また、行政もマスメディアも研究者もなぜかあまり話題に挙げてくれないが、多くの在日ブラジル人は日本で起業し、数多くの雇用機会を生み出して、同胞だけでなく、多くの日本人をも雇っている。すなわち、「雇われる側」から「雇う側」に変身した在日ブラジル人が各地にいるとい

うことである。政治家も、経済界も、官僚も、今後、移民の受け入れを議論する際、この点を肝に銘じるべきだろう。

移民をめぐっては、経済的な側面ばかりが強調されることが多いが、この講演では、文化面での貢献にも光を当てたい。在日ブラジル人は、早い時期から音楽・文学・映像表現等を手がけ、幅広い芸能・文化活動を展開してきた。また、新聞、雑誌、ラジオ、テレビ、カレンダーなど、いわゆる「エスニック・メディア」の分野でも、目覚ましい発展が見られる。

日本で生まれ育った、あるいは若くして来日した在日ブラジル人二世の将来性にも期待がかかる。ただし、一方で、在日ブラジル人一世にしても二世にしても、バイリンガルの人材や真の代弁者が



2002年の日韓ワールドカップの際に、群馬県大泉町のブラジリアン・ブラザで販売されていたロナウドの達磨。



不足している点が懸念される。在日ブラジル人の素顔や本音はまだまだ知られていないし、彼らの主張や要望は日本の各界のリーダーに届いていない。

近年、ブラジル人に関する事件や犯罪の過剰な報道が増え、かれらは不本意な形で目立っている。マスメディア報道には、責任ある公正な報道と、在日ブラジ

ル人の明るい側面をより積極的に報道してバランスを取り戻す姿勢が求められる。



横浜の大栈橋ホールで開かれた「ミス・ブラジル日本」の出場者は、在日ブラジル人のファッション・デザイナーが創作した、日伯交流をモチーフにした服を纏った。

### 3. 在日ブラジル人「デカセギ20周年」

2008年はブラジル移住100周年でもあるが、多くの在日ブラジル人からみれば、「デカセギ20周年」でもある。日本からブラジルへの移民の百年史のうちの二割は、ブラジルから日本への現代移民の歩みと重複している。以下は、4月に東京で開かれた記念式典での、「天皇陛下のおことば」からの引用である。

「近年、ブラジルから数多くの日系人が日本に来て生活するようになりました。私は、今月初めに、皇后と共に、多くの日系人が工場などで働いている群馬県の太田市及び大泉町を訪れましたが、日系人が地域社会に適応することを助けるために、職場や、地元の小学校などで、いろいろな施策が進められていることは心強いことです。ブラジルにおいて日本からの移住者が温かく受け入れられたのと同様に、今後とも、日本の地域社会において、日々努力を重ねている日系の人々が温かく迎えられることが大切であると思います。」

天皇陛下が日本人のブラジル移住を祝う式典の中で、あえて在日ブラジル人に言及したことを、移民の受入れを担う諸関係者にももっと肝に銘じてもらいたい。



ミス・ブラジル日本の優勝者、アドリアーナ・イナガキさん。

## みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

好評開催中

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が展示場に登場し、「現在取り組んでいる研究」「調査している地域（国）の最新情報」「みんなくの展示資料」についてお話しします。話題や内容は千差万別！！「それはどうして？」「これは何？」などなど、みなさまの「もっと知りたい！」を、お気軽にどんどんお寄せください。みんなくの研究者が展示場でお待ちしております。

**時間：14時30分～15時30分（予定）（★の日は14時～15時）**

※研究公演、映画会等のイベント実施日、および無料観覧日を除く日曜日に実施します。

※都合により、予定を変更することがあります。

常設展または特別展の観覧料が必要です。

【問い合わせ】

電話番号：06-6878-8560 広報企画室広報係

受付時間：平日 8:30～17:15

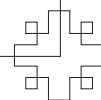
※受付時間外（土・日・祝日を含む）は、06-6876-2151（代表）へお問い合わせください。

ホームページ：<http://www.minpaku.ac.jp/>

### 今後の予定

実施日	話題	話者	場所
10月19日(日)	フィールドワークってなに？ ー私のアフリカ体験からー	松園万亀雄 館長	第5セミナー室
26日(日)	展示場の環境づくりー温度・湿度編ー	園田直子 教授	常設展示場、 特別展示場
★11月2日(日)	現代インドネシアにおける結婚事情	金子正徳 機関研究員	展示場内休憩所
9日(日)	マレーシアへの移民、マレーシアからの移民	市川哲 機関研究員	東南アジア展示
★23日(日)	西北ベトナムの黒タイ村落における染め 織物生産	櫻永真佐夫 准教授	東南アジア展示
30日(日)	イタリアと食ーその複雑な関係ー	宇田川妙子 准教授	常設展示場内休憩所
12月7日(日)	漢族の花嫁の興	韓敏 准教授	中国地域の文化展示
14日(日)	キムチに聞く	朝倉敏夫 教授	朝鮮半島の文化展示
21日(日)	デンマークの余暇活動と民衆学校	鈴木七美 教授	未定
平成21年 1月11日(日)	ハノイのえべっさん	田村克己 副館長	東南アジア展示
18日(日)	オセアニアの医療	白川千尋 准教授	オセアニア展示
25日(日)	※牧畜文化論・モンゴル研究	小長谷有紀 教授	未定
2月1日(日)	※博物館機能を活用した文化人類学・民族学に関する 教育プログラムの実践的研究	五月女賢司 機関研究員	未定
8日(日)	※宗教学・東欧研究	新免光比呂 准教授	未定
15日(日)	※日本宗教史・民俗学	廣瀬浩二郎 准教授	未定
22日(日)	ブラジルのカーニバル	中牧弘允 教授	アメリカ展示
3月1日(日)	※環境人類学・南部アフリカ研究	池谷和信 教授	未定
8日(日)	※社会人類学・移住、移動者研究	陳天璽 准教授	未定
15日(日)	※社会文化人類学・北東アジア研究	太田心平 助教	未定
22日(日)	※文化人類学・南アジア研究	三尾稔 准教授	企画展「インド刺繍 布のきらめき」会場
29日(日)	太平洋の嗜好品カヴァ	丹羽典生 助教	オセアニア展示

※話題が未定であり、話者の専門分野を記載しております。





## JICA 横浜 海外移住資料館

日本の海外移住の歴史は、1866（慶応2）年、江戸幕府による海外渡航禁止令廃止と「御免の印章」（今日のパスポート）の下付から始まりました。海を渡った日本人は移住先国で新たな文明づくりに参加し、良き市民として確固たる地位を築き、地域の発展に大きく貢献してきました。

現在、海外で生活する移住者とその子孫である日系人は、世界中に250万人以上いるといわれています。当資料館では、海外移住者を新天地での新たな文明形成に参画したいわば「国際協力の先駆者」と捉え、標本・文献・写真等の展示をとおして彼らの歩んだ道を日本人の歴史の中に正しく位置づけることをめざしています。

戦後、主に中南米への移住事業を担ってきた国際協力機構（JICA）は、移住者の足跡や役割について、多くの人々とくに若い世代にその理解を深めてもらいたいとの思いから、海外移住資料館をJICA横浜国際センターに設置しました。展示は中南米とハワイを含む北米を主た

る対象としており、地球市民として、一人ひとりが移住者からのメッセージを受け止めていただきたいとの思いが込められています。

「われら新世界に参加す」を基本テーマとして2002年10月に開館した当資料館は、多くの人々が海外移住者と体験を共有できる場として、また世界中で活躍している移住者やその子弟にとっては、心の拠り所として親しんでいただくことを目指しています。

また、現在日本には日系人をはじめとして、異なる文化背景をもつ人々がおおぜい暮らしています。今後ますます多文化化が予想される社会において、異なる文化を尊重して受容し、共生に向けて行動できる市民としての資質育成は大きな課題です。そのためにも、近代日本の黎明期に多くの日本人が海外に移住した事実、彼らとその子孫の現地での体験や貢献などを学ぶことは大いに意義があると考えられます。海外移住資料館はそのような多文化共生を学ぶ貴重な場でもありたいと考えています。



海外移住資料館が設置されているJICA横浜国際センター外観



萬屋コーナー展示風景



移民の七つ道具—移民の持参した品々

*memo*

.....

.....



*memo*

.....

.....